

ENG アトラス

めまい・平衡機能障害診断のために

小松崎 篤【著】

評者

廣瀬 源二郎

浅ノ川総合病院脳神経センター長

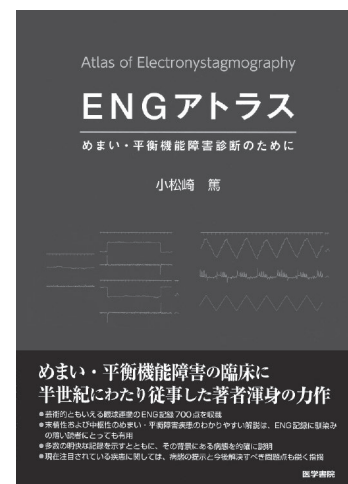
めまい・平衡障害患者を取り扱う医師にとり、眼球運動異常を診断することは非常に重要である。今回、めまい・平衡障害分野の名医として広く知られている著者が、半世紀にわたる経験をもとに自身で重要な眼振症例を注意深く記録として残されたものを広く公に発刊されたのが本書であり、まさに渾身の著作である。

診察時に肉眼観察で眼球運動異常の有無を捉えて診断するのがわれわれ一般の臨床医である。その際重要な症例はビデオ記録として残すのが一般的である。それに加えてさらに他覚的定量的分析記録として角膜網膜電位差を応用した眼振図 (ENG) を残し、後々に種々の定量的検討を加えることでめまい病態を把握することができるわけである。光学法や強膜サーチコイル法に劣るとはいえ、注意深く ENG を記録することは患者側の負担も軽く臨床的には十分すぎる眼振検査法である。

アーチファクトのほとんどない

700 以上の ENG 記録が必ずカリブレーション (校正) とともに収められたこのアトラスは見事であり、めまい患者を取り扱う臨床医にとりその病態把握の際にひもとくべき必携の教科書となるアトラスと言えよう。本書の前半では ENG の歴史、原理から始まり、利点・欠点にも触れ、いかに誰もが納得する記録を残すかが余すところなく書かれている。これに加え各疾患の典型的 ENG 記録が末梢性前庭疾患のみならず、中枢性疾患についても触れられており、簡単な症例の病歴・所見の記載とともに異常眼位の写真、MRI 所見も示されて脳幹障害、小脳障害のみならず大脳障害による眼球運動の異常症例はすべて網羅されており、さらに眼科的疾患である先天性眼振についても詳細に記載されている、まさに百科事典的アトラスである。

とかく神経内科医は、めまい患者を耳鼻科へ紹介することが多いが、真性めまいの半数近くは中枢



性疾患をその病因とすることから積極的に眼運動検査に精通する必要がある、いわゆる神経耳科学的素養として眼球運動異常の捉え方をマスターすべきである。本書を精読することでめまい・平衡障害の診断力を高め、方向一定性末梢性眼振のみならず、注視眼振や垂直性中枢性眼振、Wallenberg 症候群でみられる回旋性眼振、小脳結節病変による周期性方向交代性眼振などの中枢性眼振の病態を把握して神経診察を補填することが必要である。そのために神経内科医に必須な机上の参考書として常備したいアトラスであり、真剣に神経診察に精を出す神経内科医にぜひお薦めしたい。

A4・頁 448

2017 年 5 月

定価：本体 8,200 円＋税

[ISBN978-4-260-02131-9]

医学書院刊